子どもと保育の情景(16)

新たな子どもたちとの出会いの季節に

戸田雅美

四月は、新たな子どもたちとの出会いの月である。

私は大学を卒業して初めての四月、幼稚園の担任として、四歳児、四十人の新入園児を迎えた。それまでの実習では、三十人以下のクラスばかりを見てきていたので、男の子が二十三人と女の子が十七人の子どもたちは、大変だろうと予想はしていたものの、実際にそろってみた人数の多さに、まずは圧倒された。

入園式は何とか終わり、翌日から、その子どもたちを保育室に迎えた。前日に、主任の先生のアドバイスを聞きながら、子どもたちが親しみをもてそうな遊具を、保育室に遊びやすい感じに広げておいたので、登園してきた子どもたちは、それらの遊具に誘われるように遊び始めていた。

ところが、中には、泣いて母親と離れられない子どももいる。その泣き声を聞くと、私もまた、私の手を握ってくる子どもの手を必死で握り締めていた。もちろんこのような事態は予想をしていたものの、無理に母親から離れた上に、新人で決して保育が上手とはい

えない私のクラスになってしまった子どもが気の毒に思えた。今になって考えてみれば、保育をする私自身が不安だったからに違いない。さらに、四、五人の子どもが泣き、私の手だけでは足りずに、園内のほかの先生の手も次々とふさがっていった。

私の初めての保育の四月は、こんな情景だった。

その後、泣く子どもは、日に日に少なくなっていったが、最後まで、毎朝泣いて私と手をつないでいたのは、三月生まれで身体も一番小さい**さとこ**ちゃんだった。私が心配していると、ある日、主任の先生が、「大丈夫。こんなふうに泣いて主張できる子は、納得すれば、しっかりするから。それよりも、今頑張っていて、後で泣く子もいるからね。案外、そういう子どものほうが難しいこともあるのよ」と教えてくださった。私は、恥ずかしいことに、そのとき初めて「幼い子どもにとっては、『泣く』ということは自己主張なのだ」という極めて当たり前のことが、すとんと胸に落ちた。

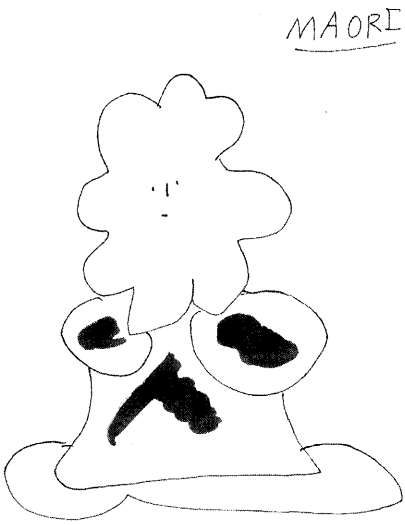
主任の先生が予想したように、**さとこ**ちゃんは、泣きやんでみると、意志のはっきりした子どもであることがわかってきた。一日が終わって帰るときには、クラスの女の子たちに一番人気のあった**こうじ**君と、誰よりも手をつなぎたがった。私が「**さとこ**ちゃん、今日は違う人と…」と言っても、「三人でつなぐ！」と言って、毎日ちゃんと**こうじ**君の一方の手を確保して、にこにこと保育室を出て行くのだった。また、四歳児にとっては、一人で縄跳びを跳ぶことは容易なことではなかったのだが、仲良しの**かなこ**ちゃんがとても上手に跳べるのを見ると、小さな身体で毎日一所懸命練習をし、とうとう跳べるようになってしまった。

主任の先生の予言が、もう一つ的中していることがわかったのは、もうすぐ六月になるころのことだった。それまで一度も泣いたことがなく、しっかりしている印象だった**ももか**ちゃんが、登園拒否を始めたの

だった。みんなは幼稚園が楽しくなって、好きな遊びを始めているというのに、**ももか**ちゃんは、たった一人、毎朝「幼稚園なんて来たくない!!」と抵抗し、母親と私を驚かせた。その上、**ももか**ちゃんは、**さとこ**ちゃんのようにしくしく泣くのではなく、私と手をつなごうともせず、断固として家に帰りたがった。

園長先生は、私がほかの子どもたちの保育だけでも四苦八苦しているのを見て、それでは困るだろうと、ある日、**ももか**ちゃんを園長室に連れて行ってくださった。ところが、**ももか**ちゃんは、いっそう怒りだし、「ばかばか幼稚園のばかばか先生!」と言って、園長室にあるものを、次々と窓から外へ投げたのだそうだ。園長先生は、その日の保育が終わってから、おもしろそうに笑って私に報告してくださった。

それから、私は、**ももか**ちゃんと少しでも関係ができるようにと、**ももか**ちゃんの自宅に遊びに行ったり、機会をとらえて、一緒に動くようにした。何とか**ももか**ちゃんに私を信頼してもらいたいと一所懸命だった。



その後も、**ももか**ちゃんは、プールや避難訓練など、何か新しいことがあるたびに必ずと言っていいほど「やらない!」と抵抗した。けれども、未熟な担任であった私のことは好きになってくれたらしく、私が一所懸命に話をすると、何とか自分の気持ちに折り合いをつけてくれるようになった。

最初のころの保育は、私にとって何もかもが驚きと発見の連続で…、と言えば格好がよいが、まるで見通しのきかない霧の中を手探りで歩き回っているようなものだったと思う。

昨年の秋、このクラスの保護者たちと、本当に久しぶりに会う機会があった。

さとこちゃんは看護師になっていた。彼女が、看護学校の学生だったときに、母親が大きな病気をしたという。そのときは、看護師の卵として、献身的に看護をしたらしい。**さとこ**ちゃんの母親は、にこにこと安心した笑顔で、そのときの**さとこ**ちゃんの活躍ぶりを話してくださった。その会には、母親と一緒に**さとこ**ちゃん本人もやってきていた。驚いたことに、**さとこ**ちゃんは、幼稚園のころの思い出話の中で、「**こうじ**君と手をつなぎたくて…」「**こうじ**君は女の子の間で人気があって…」と楽しそうに話し、私も「そうそう…」とこの共通の思い出話に花が咲いた。

ももかちゃんとは、ずっと年賀状のやりとりをしていたので、彼女が国際線のスチュワーデスになったことを、私はすでに知っていた。**ももか**ちゃんの母親は「『ばかばか幼稚園のばかばか先生！』なんて園長室から物を投げた子ども、ほかにいませんよねえ。私もあのときは、もうどうしようと思って。でも、そんな子どもが、今は世界の空を飛び回っているなんて。どんな子どもでも心配ないって、そんな見本になっちゃいますよね」と、笑いながら話してくれた。

こんな具合に、私は四十人の子どもたちとたくさんの物語を紡ぐことができた。この連載で描いている子どもと保育の情景は、ほんの短い時間の物語である。その物語には、もっともっと長い時間の軸がある。四月、新たな子どもとの出会いの季節。保育の一つひとつの場面の連なりの先に思いをはせる季節でもある。

（東京家政大学）